SANITARY ZOOLOGY

衛生動物

Vol. 2 No. 1

恙蟲の1新種 *Trombicula himizu*, n. sp.

について

A new larval mite, *Trombicula himizu*, n. sp. from Japan

佐々 學・熊田信夫・林 滋生・榎本義文

Manabu Sasa, Nobuo Kumada, Shigeo Hayashi, Yoshibumi Enomoto,

(東京大學傳染病研究所)

福住定吉・小畑義男

Teikichi Fukusumi, Yoshio Obata

(北里研究所)

ここに記載する恙蟲の1新種は傳染病研究所及び北里研究所における日本産恙蟲の調査研究において殆ど同時期に全く獨立に發見されたもので、ここに兩者の協同研究として報告する。即ち、1950年11月20日に林が山梨縣山中村(富士山麓で、おそらく同地方の恙蟲病有毒地の一部に位置する)において捕えた2頭のホンシユウヒミズモグラ *Urotrichus talpoides hondonis* Thomas から3疋を、熊田、榎本が11月23日神奈川縣大山で捕えた同じ宿主から2疋を、また小畑が11月27日神奈川縣山北町で捕えた同じ宿主から143疋の標本がえられたものである。この種類は以下のべるような顯著な形態的な特徴を示し、これまでに記載のないものと考えられるが、すべての標本がホンシユウヒミズモグラのみから採集され、同時に同じ場所から捕えられたアカネズミ *Apodemus speciosus* からは全く見出されなかつた點からみて、少くもヒミズモグラを特異的に宿主として選擇する恙蟲の1種であろう。本種が人を刺すか、或は更に恙蟲病病毒の媒介をなすかどうかは今までのところ全く不明である。以上の採集地における宿主及び恙蟲の採集記録を整理すると、第1表に示す通りである。

第1表 山梨縣及び神奈川縣における採集記録

採 集 地 採 集 年 月 日	1950年11月20日 山 梨 縣 山 中 村		1950年11月23日 神 奈 川 縣 大 山		1950年11月27日 神 奈 川 縣 山 北 町			
恙 蟲 の 種 類	宿 主 及 び 數	<i>Urotic- hus ta- lpoides hondonis</i> 2 匹	<i>Apode- mus speciosus</i> 6 匹	<i>Urot.</i> 4 匹	<i>Apo.</i> 2 匹	<i>Urot.</i> 1 匹	<i>Apo.</i> 3 匹	計
<i>T. himizu</i> n. sp.		3	0	2	0	143	0	184
<i>T. pallida</i>		0	13	0	0	0	131	144
<i>T. palpalis</i>		0	4	0	0	0	0	4
<i>T. fuji</i>		0	1	1	24	0	173	199
<i>T. kitasatoi</i>		0	0	0	31	0	13	44
<i>T. miyajimai</i>		0	0	0	9	0	6	15
<i>T. japonica</i>		2	5	0	5	0	47	59
<i>T. mitamurai</i>		19	4	0	0	0	0	23
<i>Gahrlepiea</i> sp.		0	2	0	2	1	179	184
<i>Ascoschongastia</i> sp.		0	2	0	0	0	3 ?	5

幼蟲の記載

Trombicula himizu, n. sp. (和名, ヒミズツツガムシ, 日不見恙蟲)

學名及び和名は宿主のヒミズモグラから由來している。本種は形態的に *Trombicula* 屬(廣義)の *Trombicula* 亞屬に屬することは明かで、胸部の剛毛が極めて多數(約 60 本)あつて、何れも少數の棘狀の側枝をまばらに生じていること、觸鬚第4節腹面の毛が分岐し、第3脚基節の剛毛がその前縁から生ずることなどが特徴である。

顎體部：觸鬚は第2節が側方に角張つて突出し、第2節背面、第3節背面の毛は單條、第4節の毛は腹面毛が數本に分岐、側縁毛は單條、背面毛は分岐する。第5節の毛は通常で1本の單狀の棘と6本の分枝毛を生ずる。第4節の爪は3本に分岐する。大顎基節は角張り、ガレア毛は羽毛狀に分枝する。

背甲板：概ね左右に幅廣い長方形をなし、その形は *Trombicula pallida* に似ている。後側毛の基根部に沿つてやや張出し、後隅角はなだらかに丸味を帶び、後縁はほぼ直線で、中央部はわづかに凹入する。感覺毛基根は左右の後側毛を結ぶ線より明らかに後方にある。感覺毛は甚だ細長いのが特徴で、凡そ 80μ に達し、末側 $\frac{3}{5}$ から約 10 本の分枝を生ずる。前側毛の側枝は比較的細長く、前中毛の側枝はこれより太いが後側毛の側枝の性質は胸部背面の剛毛に似ており、甚だ特

第 2 表 *T. himizu* の標準測定値

	AW	PW	SB	ASB	PSB	SD	AP	am	al	pl	s	hm	dsa	ds ₂	vsa
タイプ (大山)	60.5	72	32	27.5	10.5	37	19	67	44.5	60.5	82	54	46.5	56	32
パラタイプ 1 (大山)	67	77.5	32	27.5	11.5	38	20	63.5	40.5	61.5	72	55	48.5	55	34
パラタイプ 2 (山中)	65.5	80	33	27.5	11	37.5	19	—	42.5	61	79	59.5	50	57.5	31.5
パラタイプ 3 (山中)	62	75.5	30.5	23	14	37.5	19.5	50.5	43.5	63	80.5	57	49	56.5	31
パラタイプ 4 (山中)	61	75.5	31.5	24	11.5	35	20	59	43	56	79.5	58.5	51	57	32
山北産 1 2 匹の 分布範囲	58.5	75.0	33.6	24.8	7.5	32.1	18.6	51.9	42.9	47.8	81.0	48.2	42.9	48.5	—
	64.6	88.2	36.4	30.2	12.9	42.9	22.6	60.9	47.4	58.9	92.2	55.7	48.9	58.9	—
同じく平均	62.2	78.2	34.8	27.3	11.1	36.5	21.1	57.4	44.5	52.9	85.6	51.5	45.1	52.7	—

注 : タイプ及びパラタイプは熊田の測定、山北産のものは福住、小畑の測定による。

(4)

衛生動物 1951年 Vol.2 No.1

第1圖 *Trombicula himizu*, n. sp.
1. Scutum 2. dorsal seta I 3. palp

徴があり、比較的少数
(凸側に凡そ8本)の
太い棘状の側枝がまば
らに生じている。標準
測定値は第2表の通り
である。

胸 部： 背甲板は
両側に2對のほぼ同大
の眼を有する。胸背面
の剛毛式は模式標本で

2, 15, 4, 14, 14, 8, 4, 2 (計63) 副模式標本では57ないし62本で、何れも第3
列目に2對の剛毛

より成る列を區別
しうるのが本種の
特徴。背面の剛毛
は何れも一見して
本種の鑑別をなし
うる程特異な性質
を示し、一側に僅
かに5~7本前後の
太い棘状の側枝が
太い主幹からまば
らに生じている。

剛毛の長さは後方
のもの程長い。

第2圖 *Trombicula himizu*, n. sp.
左：胸部 腹面 右：胸部 背面

胸腹面の剛毛は、2對の胸板剛毛のほか肛門の前方に32~34、肛門の後方に
16~18本(計48~52)があり、背面の剛毛に比べて短かく、側枝は細くて数が
多い。

脚： 第1脚基節の毛はその前縁よりやや後方から、第2脚基節の毛は後縁か
ら、第3脚基節の毛はその前縁から(つまり *Trombicula palpalis* や *Trombicula*
fuji と同型式)生じている。第3脚末節に直立單條剛毛はない。Wharton (1948)

の定義した各脚の感覚毛は次の通りである。

第1脚： genuala 2, tibiala 2, microtibiala 1, spur 1, microspur 1, subterminala 1, parasubterminala 1, pretarsala 1.

第2脚： genuala 1, tibiala 2, spur 1, pretarsala 1.

第3脚： genuala 1, tibiala 1.

本研究の費用の一部は文部省科学試験研究費に仰いでいる。本研究は傳研衛生動物研究室の「恙蟲の研究 第9」をなすものである。

模式標本は神奈川県の大山中腹で 1950 年 11 月 23 日に採集，副模式標本はこれと同じ条件で採集された 1 疋と，同年 11 月 20 日に山梨縣富士山麓山中で採集された 3 疋を指定した。何れも傳研衛生動物研究室に保管してある。

日光尾瀬原のルリイトンボに 寄生するミズダニ¹⁾

Studies on the water mite parasitic on a dragon-fly
from Ozegahara, Nikko.

今 村 泰 二

Taiji Imamura

[北海道学藝大學旭川分校生物學教室]

トンボ類に寄生するミズダニに関しては古くから知られている。Münchberg (1935) はそれに関する研究史を述べ、併せてヨーロッパに於けるトンボ類に寄生するミズダニについて詳しい研究をしている。日本からは宮崎 (1936) が九州のイトトンボ *Coenagrion quadriggerum* に *Arrenurus* 屬ミズダニの 1 種が寄生している事を記し、内田 (1937) はそのミズダニが *Arrenurus agrionicolus* の第 1 幼蟲 (larva) である事を報告している。今村 (1950) は大雪山の *Arrenurus da-isetsuensis* の第 1 幼蟲がエゾルリイトンボ *Enallagma deserti yezoensis* 及びオホルリボシヤンマ *Aeschna nigroflava* に寄生する事を記している。

筆者は先般、朝比奈正二郎博士より同氏が 1950 年 7 月 15 日に日光尾瀬原より

¹⁾ 本研究は文部省科学研究費による